て緻密で地山の可能性が大きい。

三、掘削範囲は、すべてこの付近に特有な淡赤褐色シルト質の山土。

また、平成八年度においては、次の調査も実施した。

〔墳丘調査〕

墳丘調査は諸種の事情で滞りがちであったが、仁徳天皇百舌鳥耳原中陵後円部の残りがよい部分のエレベーションをとった。

〔石塔等の写真測量〕

石塔等の写真測量は、平成八年度から始めた新規事業である。堂塔式の陵墓等は、五二二基を数え、うち二七九基の石塔については昭和十三年から十八年にかけて能勢丑三氏らに実測を依頼して図面が完成している。この事業は、その残りの石塔を中心に年次計画に沿って地上写真測量による実測図を作製するものである。初年度は、次の石塔を実測した。

一、高倉天皇皇后徳子大原陵の石造五輪塔（京都市左京区大原草生町寂光院後。総高〇・八五メートル）

二、後花園天皇分骨所の石造宝篋印塔（京都市上京区般舟院前町　般舟院陵内。総高一・三三メートル）

三、後土御門天皇分骨所の石造宝篋印塔（同所。総高一・二五メートル）

〔近衛天皇安楽寿院南陵内の仏像調査〕

同陵の多宝塔内に安置されている阿弥陀如来座像及び大日如来座像の保存状態、様式学上の調査及び写真撮影を、京都国立博物館の資料調査研究室長伊東史朗氏に依頼して、十月十七日に実施した。この調査結果については、本誌に掲載してあるので、参照されたい。

恵我長野西陵整備工事区域の調査

大阪府の河内平野の大和川と石川の合流地点の西側には、よく発達した段丘地形が認められる。この段丘面を利用して大小様々な古墳が展開しており、古市古墳群と呼ばれている。仲哀天皇の恵我長野西陵は、その西端付近に位置する墳長二四〇メートルを超える前方後円墳である。主軸をほぼ南北に添え、幅五〇メートル以上の幅広の濠に囲まれている。墳丘部は等高線が大きく乱れており、本来の形状をうかがい知ることは難しい。現状では後円部東側の標高三七メートル付近に平坦面が認められ、以前崩落した西側部分（今回の第33トレンチ付近、本誌第三六号参照）の東端で埴輪列が確認されていることを考慮すると、当該レベル付近に一段目のテラス面を求めることが可能であろう。また、東側では標高四〇メートル前後にも幅広の平坦面が存在する。傍証はないが、二段目のテラス面に対応することも考えられよう。このように考えることが許されるならば、四〇メートルの標高で後円部側では裾部まで二〇メートルに満たないのに対し、前方部のとりわけ正面部では二五メート

ルを超える。浸食の強弱はあると想定されるものの、前面にかけてかなり掻き出されていると見なせよう。

このような等高線の乱れの要因は、本陵がいわゆる中世城郭として利用されたことによるものであろう。裾部からは墳丘部に向けて竪堀等が掘り込まれているし、墳頂部から鞍部にかけての周囲には二重の薬研堀が一部竪堀等により切られてはいるものの、よく残存している。この堀は外側にはそれぞれ土塁を有しており、防御機能をより強化している。後円部北西側の中段に曲輪状の張り出しが認められるのもその特色と見なしてよかろう。本陵の埋葬施設として横穴式石室を想定する研究者もいるが、その根拠となっている墳頂部へ向かう盗掘抗とされている掘り込みは、あるいは竪堀等の可能性もあり、その壁面には顕著な石材等は観察されないことを指摘しておきたい。

さて、本陵の墳丘裾部も他の濠のめぐる陵墓と同じく、経年の波浪により浸食され、各所でガマ状の形状を呈している。そこで、裾部全周に関して護岸工事等の整備工事が計画された。このことに伴い、平成八年十一月五日～二十六日にかけて、事前発掘調査を実施した。この間、考古学・地質学・土木工学の各専門家の現地検分を願い、それぞれの立場からの指導や助言を賜った。

調査は、護岸工事の予定されている墳丘側に二九本（第1トレンチ～第30トレンチ・第33トレンチ。うち、第11・25トレンチは未掘）、堆積土の除去が予定されている前方部外堤東隅角部付近に二本（第31・32トレンチ）、併せて三一本のトレンチを設けて進めた（第1・2図）。トレンチの規模は長さ五メートル×幅二メートル、もしくは長さ四メートル×幅四メートルを基本とし、各トレンチの調査の進展状況により、拡張等の規模の変更を加えた。

調査地においては以下のような基本的土層を認めることができた。

Ⅰ層　表土。黒色腐植土。現地表面をなす層（Ⅰ）と、暗黒灰色を呈し、ある時期の表土と考えられる層（Ⅰ′）がある。

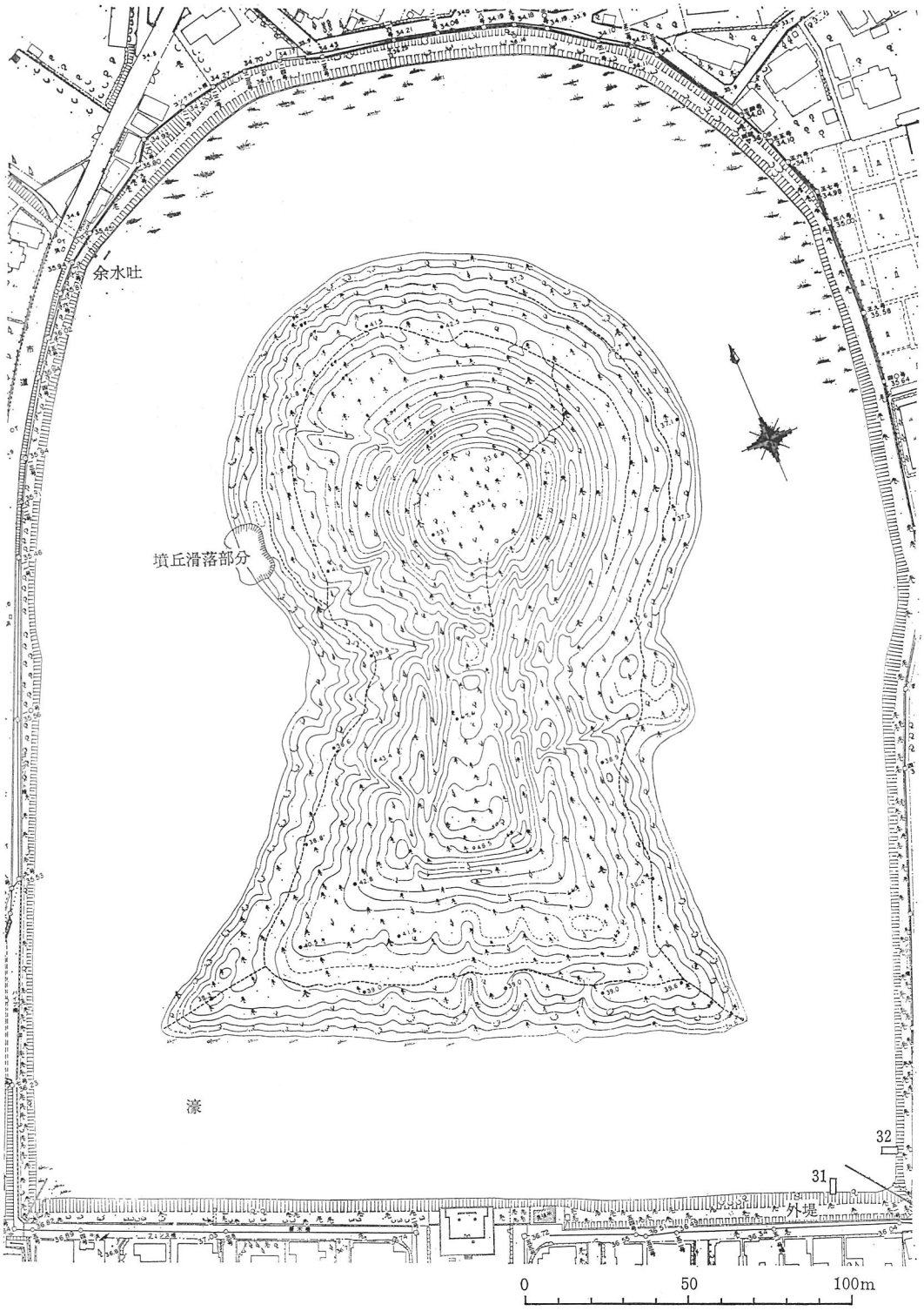
Ⅱ層　攪乱層。人為的なものと樹根などによる自然的なもののほか、ザリガニの営巣の結果として攪乱されたものがある。

Ⅲ層　濠内の堆積土。築造時に近いと思われる自然堆積層は検出されていない。有機物を含む黒色腐植土（Ⅲa）と含まない層があり、後者はさらに砂質土（Ⅲb）と粘質土（Ⅲc）に分けられる。

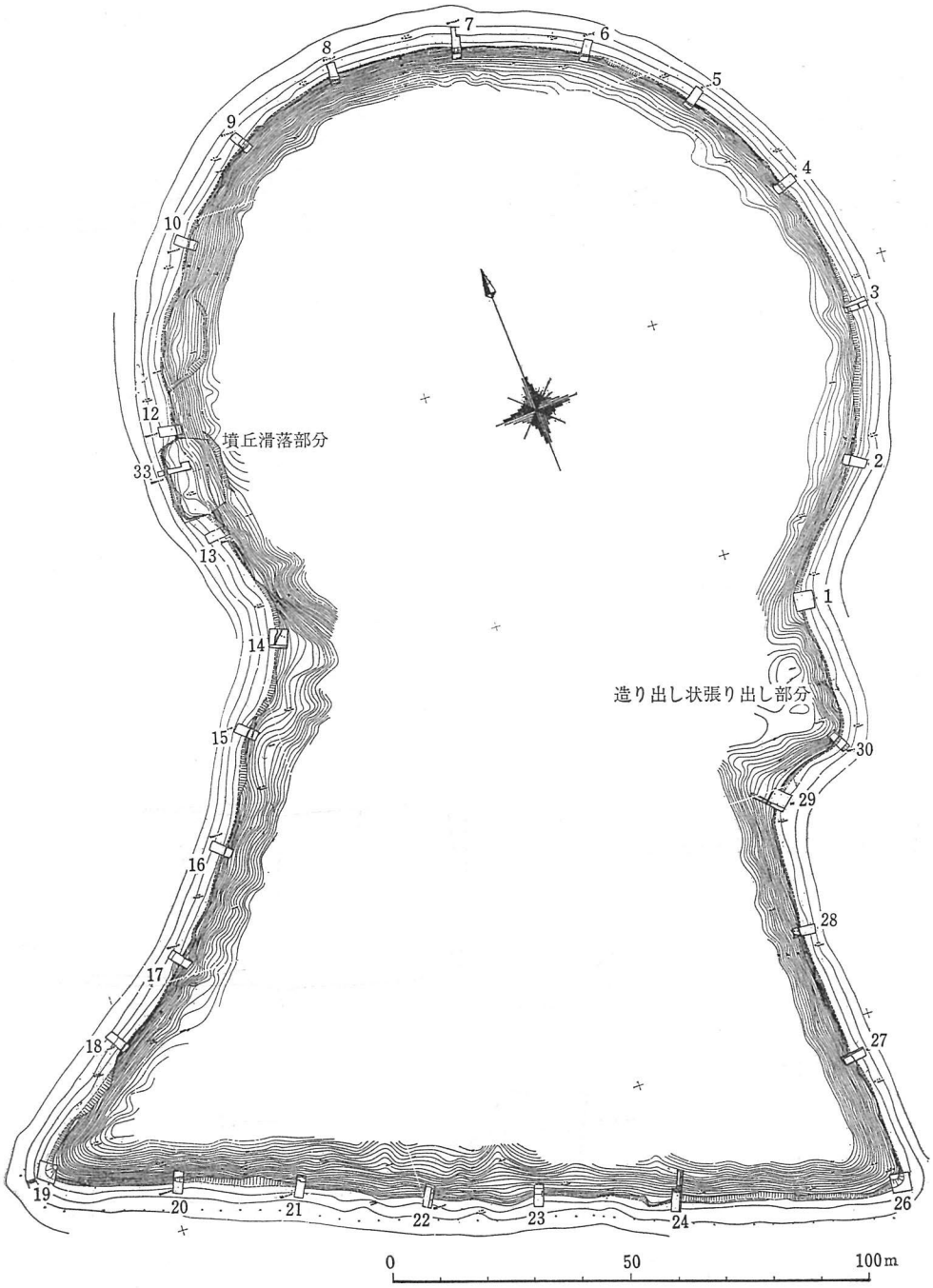
Ⅳ層　崩落堆積土。締まりがあまり良好ではない灰褐色系の土。木根などが多く侵入している。

Ⅴ層　後世の盛土。比較的堅く締まった灰褐色、もしくは黄褐色系の土（Ⅴa）。やや粘質気味となっているが、砂質味を帯びている箇所もある。濠底の浚渫に伴う嵩上げ土も含まれよう。一部に築城に伴う整備にかかる際の盛土と見なしたほうがよい層（Ⅴb）がある。

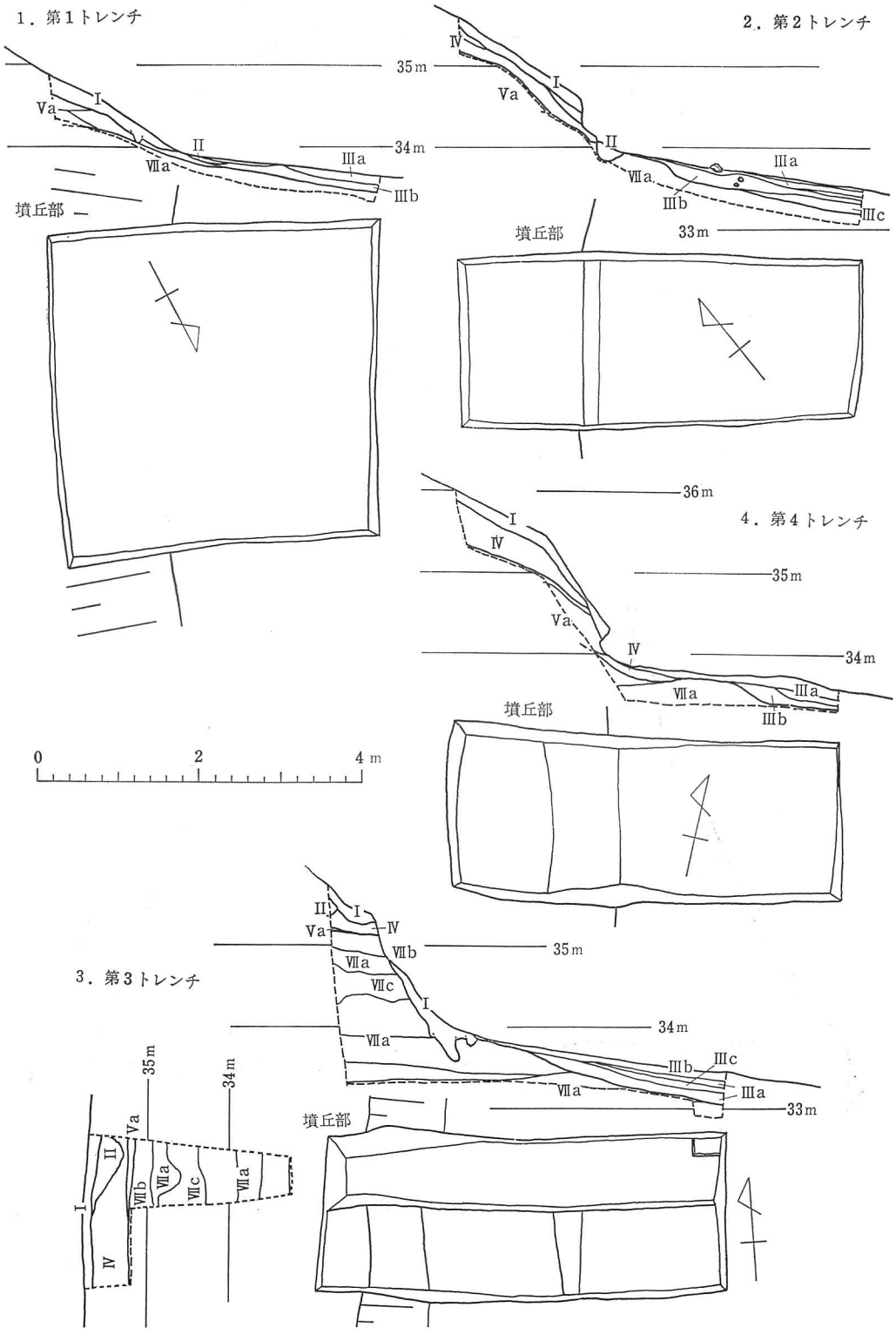
Ⅵ層　築造時の盛土。今回の調査では明確に築造時の盛土と考えられる層は確認できなかった。ただし、一部のトレンチでその可能性がある層を認めたので、便宜上本層に含めることとする。



第１図　恵我長野西陵地形図（1/2000）、調査箇所（外堤部）の位置



第２図　恵我長野西陵調査箇所（墳丘部）の位置（1/1500）



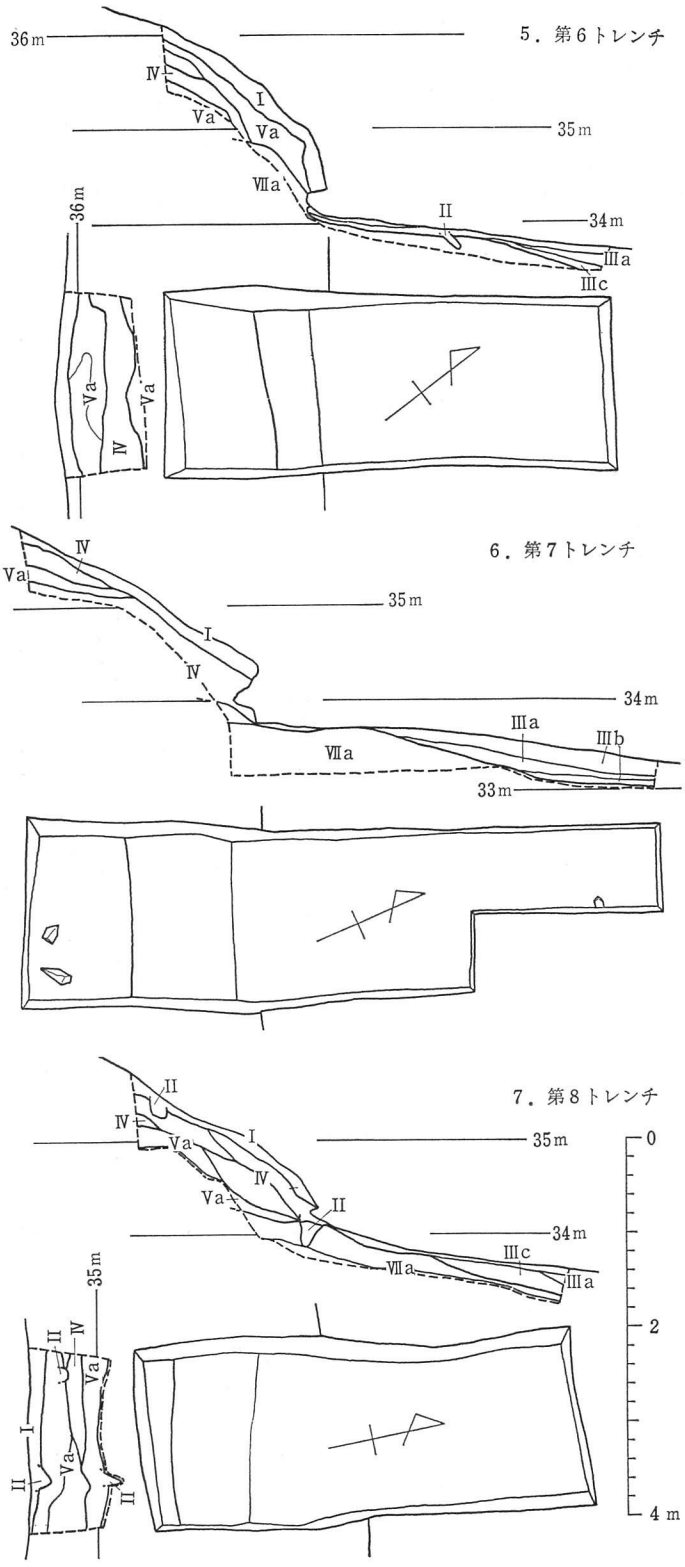
第３図　恵我長野西陵トレンチの平面および断面(1)（1/80）

Ⅶ層　地山。基本的には灰褐色、または黄褐色系の砂質土・粗砂層、あるいは粘質土で、堅く締まっている（Ⅶa）。所謂ジャッケツとよばれる砂礫層も認められる。一部は大阪層群と考えられるという。後円部の東方では赤褐色系シルト層（Ⅶb）となっている箇所があり、段丘堆積物の上層部分と考えられている。また、縄文・弥生土器の包含層（Ⅶc）が西方部分で観察された。

一、墳丘部

後円部

本陵の墳頂部は径約三五メートルのほぼ平坦面となっており、周縁部には高さ数十センチの土塁状の痕跡をとどめている。平坦面中心部から裾部までの距離は東側で約七〇メートルであるのに対し、西側では八〇

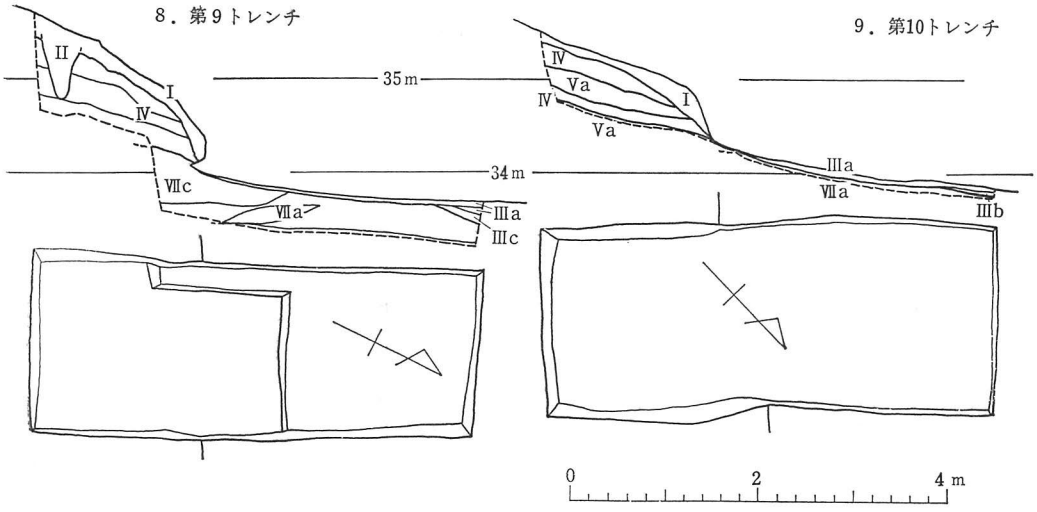


第4図　恵我長野西陵トレンチの平面および断面(2)（1/80）

メートルに近い。西側に曲輪状張り出しや竪堀が認められることと無縁ではなかろう。また、東側の裾部は西側に比べて、傾斜がきつく、崖状の地形を呈している。防禦上の必要性かとも考えられるが、濠水による浸食、濠がかって田畑として利用されていたこと等も考慮しなければならないであろう。後円部にはくびれ部を含めて一四箇所のトレンチを設けた。

第1トレンチ（第3図1）　東くびれ部に設けたトレンチである。くびれ部といっても、後円部から前方部への移行はシャープさに欠けている。比較的浅い位置で緻密な黄褐色粘質土の地山（Ⅶa）を確認した。その上位は一部に崩落堆積土の可能性もある層を間層に含むものの、基本的には盛土（Ⅴa）と判断される。拳～人頭大の角礫や円礫が認められるものの、その数は少ない。約六〇〇点の遺物が出土しているが、そのほとんどは埴輪片で約三〇点の瓦片なども含まれている。本トレンチの遺物の出土点数は、今回の調査の出土量の二割近くを占めている。

第2～6トレンチ（第3図2～第4図5）　後円部西側に設けたトレンチ。基本的層序は墳丘側が上位から表土（Ⅰ）、崩落堆積土（Ⅳ）、後世の盛土（Ⅴa）、地山（Ⅶa）、濠側が濠内堆積土（Ⅲ）と地山（Ⅶa）からなる。この部分は他の調査箇所に比べて、地山上面の検出レベルが高くなっている。とくに第3トレンチでは標高三五・一メートルもある。そこでは、他のトレンチでは確認できなかった赤褐色系シルト層（Ⅶb）が検出された。藤井寺市教育委員会による対岸の外堤部分の調査[1]で、外堤に直交する東西溝が掘り込まれている層に対応している。本層からは旧石器（第20図52）一点が出土していることに注意しておきたい。後述する西側のトレンチでは、裾部における地山の検出レベルが標高三四メートル前後であること、また、北側外堤では標高三

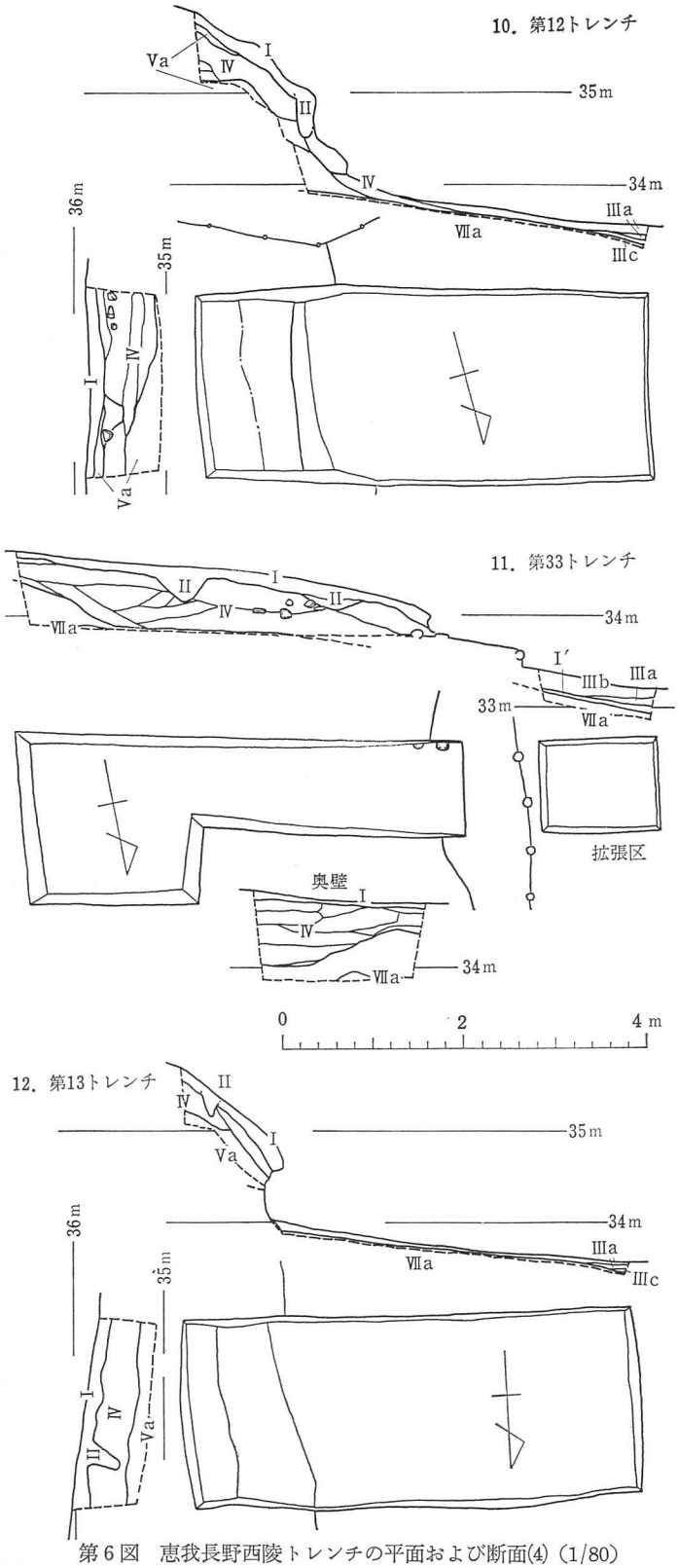


第5図　恵我長野西陵トレンチの平面および断面(3)（1/80）

三・七メートル前後であること（本誌第二六号参照）等を考慮すると、本来の地山面が削られている可能性はあるにせよ、本陵の選地された箇所は東側の方が高くなっていたことだけは指摘できるであろう。一方、濠側では標高三三・七メートル、及び三三・四メートル前後で地山の浸食が顕著である。ある時期の濠水面を示すのであろう。

出土品は第2トレンチが約八〇点、第3トレンチ約三五点、第4トレンチ一〇点、第5トレンチ九点、第6トレンチが約三〇点である。そのほとんどは円筒埴輪の破片であり、若干の土師器・陶器・瓦片、及び旧石器一点も含まれている。

第7～10トレンチ（第4図6～第5図9）　後円部の西側北半に設定したトレンチである。墳丘側では、裾部においては三四・二メートル未満のレベルで確認される地山は墳丘方向に緩やかに上昇していく。第9



第6図　恵我長野西陵トレンチの平面および断面(4)（1/80）

トレンチでは焦げ茶色を呈する粘性を帯びた砂質土が認められた。脆弱な土器の小片も含まれており、縄文・弥生土器の包含層（Ⅶc）という。これらの地山の上位には一部、浚渫時の嵩上げ土（Ⅴa）である小ブロック状となった灰色粘質土層などが認められるものの、基本的には締まりを欠く崩落堆積土（Ⅳ）からなる。第8トレンチや10トレンチでは、崩落と盛土が繰り返し行われているのがよくわかる。ここでも、濠側においては地山（Ⅶa）が顕著に浸食されている箇所がある。

遺物としては第7トレンチが約五〇点、第8トレンチ約六〇点、第9トレンチ約九〇点、第10トレンチ約二六〇点出土している。ほとんどは円筒埴輪片であり、若干の土師器・須恵器・瓦の破片、石器も含まれている。

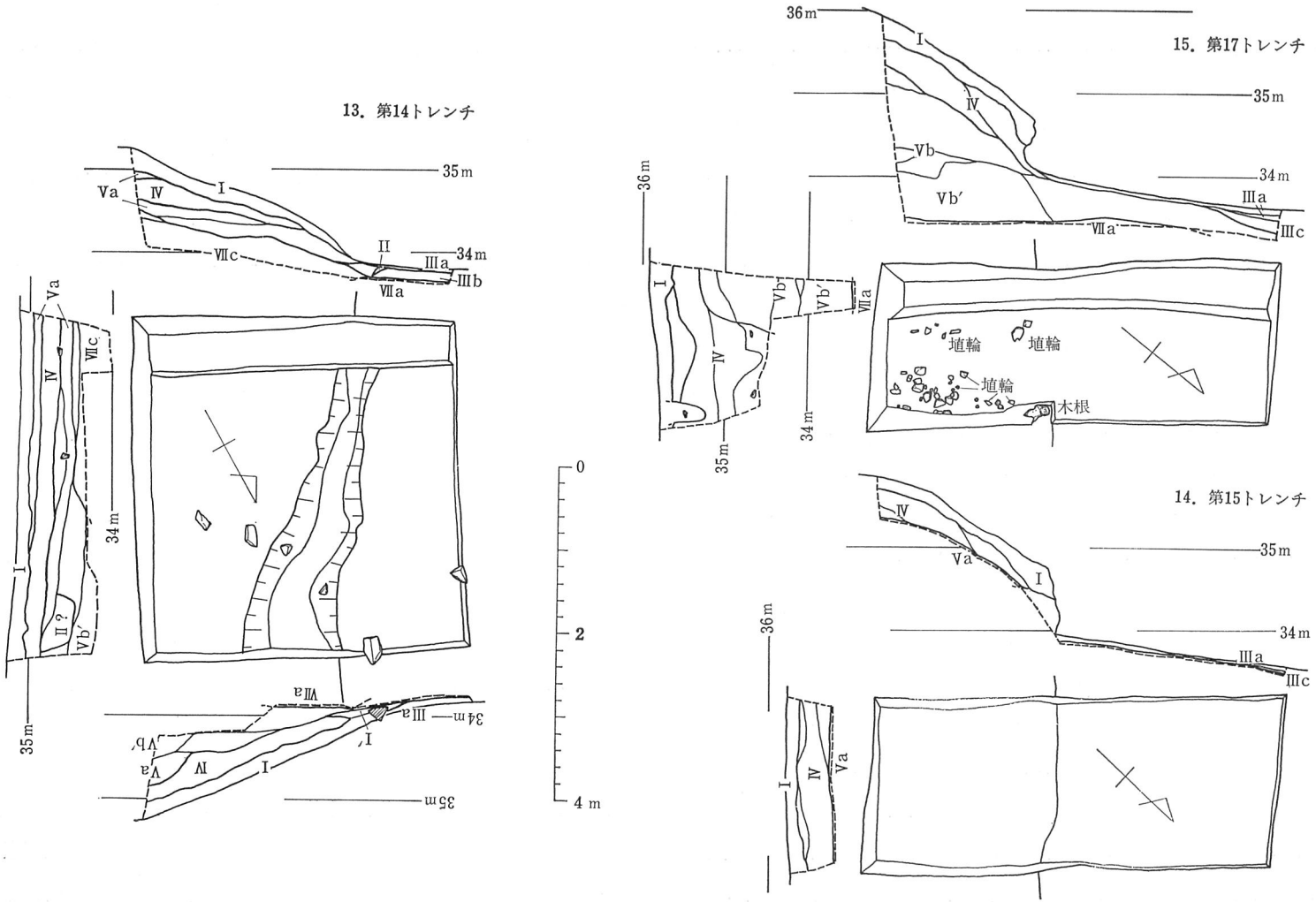
第12・33・13トレンチ（第6図10～12）　第11トレンチは未掘である。後円部の西側には、墳丘部の一部が地滑りしている箇所が大きく二箇所認められる。その南側の箇所に、三本のトレンチを設けた。第33トレンチはそのほぼ中央に位置するが、粘質土もしくはバイラン土の地山（Ⅶa）上に厚く崩落堆積土（Ⅳ）が観察される。墳丘側の壁面（奥壁）でみてみると、地山（Ⅶa）が北側に向けて大きく下降するのが知られる。あるいは竪堀が存在し、堀底に沿って滑落したことも考えられよう。一方、両端に位置する第12・13トレンチでは崩落堆積土（Ⅳ）の下位に暗灰白土などがあり、地山（Ⅶa）上にのっている。本層は均一性には欠けるものの、堅くて緻密である。一応、後世の盛土（Ⅴ）と見なしておくが、遺物も含まれておらず、築造時の墳丘の可能性も全面的に否定できるものではない。

第12トレンチ約二〇点、第13トレンチ一六点、第33トレンチ六五点の遺物が出土している。大半は埴輪の破片であるが、第12トレンチⅣ層中と第13トレンチⅦa層の上から石鏃（第20図50・51）、第33トレンチⅣ層中からはサヌカイト剝片が検出されている。本陵の位置する洪積段丘上に縄文・弥生土器の包含層（Ⅶc）が認められる関係であろう。

第14トレンチ（第7図13）　西側くびれ部に設定したトレンチである。東側くびれ部に比べて、やや鋭角的ではあるものの、シャープな移行には欠ける。この付近の墳丘側には竪堀が断面V字形を呈しつつ明瞭に残存している。

濠側では濠内堆積土（Ⅲa・b）の下位は地山（Ⅶa）であった。この地山は標高約三三・九メートルでほぼ水平に墳丘側に向かっているが、南側部分ではその上に縄文・弥生土器の包含層（Ⅶc）が認められる。本層は北側に向けて緩やかに下降し、その部分に含まれる土層が、後述する前方部正面の各トレンチで検出された灰褐色土を霜降り状に混じえる黄褐色粘質土（Ⅴb′、以下霜降り状土層という）と酷似することが注目される。Ⅴb′層を築城に伴う盛土と見なす積極的根拠はないが、Ⅶc層のカットがⅤb′層形成と同時期、もしくはそれ以前であることだけはいえよう。

約五〇点の遺物が出土している。そのほとんどは埴輪片で、他に土師



第７図　恵我長野西陵トレンチの平面および断面(5)（1/80）

器・磁器・瓦の小片がある。

前方部

本陵の前方部も後円部と同じく、中世城郭として利用された痕跡を明瞭にとどめている。つまり、正面部分では標高三五～三九メートル付近、および四〇～四一メートル付近にかけて、それぞれ竪堀の痕跡が認められる。両者間は墳丘方向（内側）へやや下降しているのが注意される。上段竪堀の後方には堀切りもなされており、周辺からの攻撃に対して、十分な配慮がなされている。両側辺にも残存状況は良好ではないが、竪堀の存在を認めることができる。とりわけ、東側辺の中央部付近では竪堀が近接しており、畝状空堀群といってもよいような状況を示している。前方部には東に位置する造り出し状張り出し部分を含めて、一五箇所のトレンチを設定した。

第15・16トレンチ（第7図14）　前方部西側辺北側に設けたトレンチ。両トレンチとも崩落堆積土である灰褐色土（Ⅳ）と小ブロック状になった灰黄褐色土（Ⅴa）が厚く認められ、地山（Ⅶa）は検出できていない。第15トレンチは墳丘裾のラインが濠側にやや張り出している箇所で、造り出しの可能性も考慮されたが、調査範囲においては直結するような地層とは考えられず、形象埴輪等も出土していない。

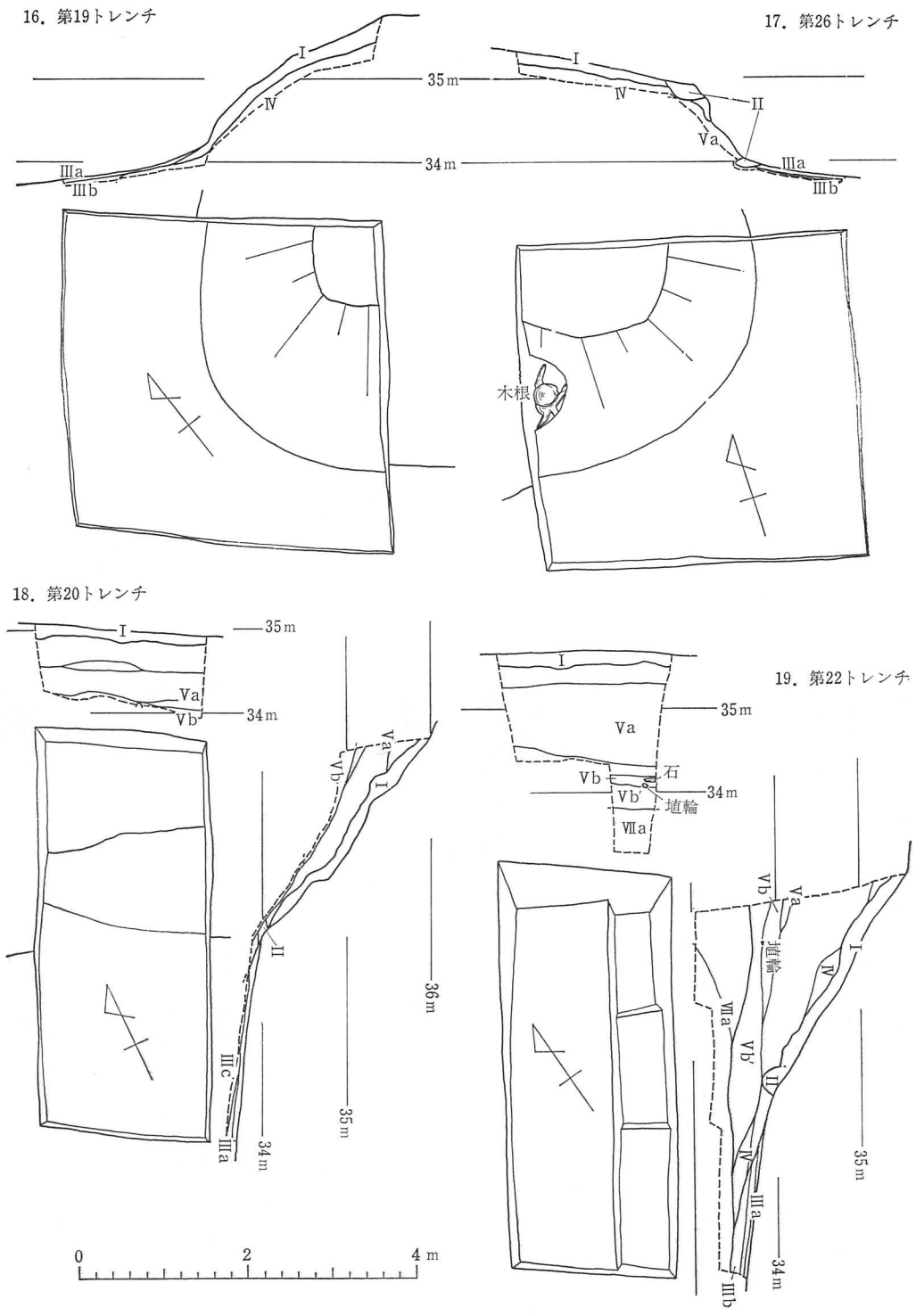
第15トレンチからは埴輪一〇点、瓦二点、第16トレンチからは埴輪五七点、瓦二点、鉄片一点が出土している。

第17・18トレンチ（第7図15）　前方部西側辺南側に設定したトレンチである。前方部西側辺は、第17トレンチ付近から先端部がやや大きく広がるようになる。第18トレンチの墳丘側では、表土（Ⅰ）下に攪乱層（Ⅱ）と軟質の灰褐色土（Ⅴa）が観察される。Ⅴa層はブロック状を呈し、脆弱でもあることから、浚渫土を盛り上げたものであろう。

一方の第17トレンチでは、地山と見紛うような固くて緻密な土層（Ⅴb）が認められ、若干ではあるが、埴輪片などが含まれていた。本層の性格を探るため、南側部分を掘り下げたところ、その最下層（Ⅴb′）は第14トレンチでも認められた霜降り状土層であり、地山（Ⅶa）へ直接していた。Ⅴb層は堅さなどから判断して、かなり入念に盛土されたものと考えられる。北半部分は結果的には大きく傾斜し、内部には比較的大きな埴輪片を含む崩落土が堆積していた（Ⅳ）。霜降り状土層を築城に伴う整備にかかる際の盛土と見なすことが許されるならば、該所は竪堀部分と考えられよう。地山（Ⅶa）は他トレンチでは確認できていない紫味を帯びた灰色砂質土であり、ほぼ水平に墳丘側に延びている。大きくカットされていない限り、本来の墳丘裾部は内側に残されている可能性が高い。また、濠側では、地山は深く潜り込むようである。

第17トレンチから一六〇片余り、第18トレンチから一七点の遺物が出土している。そのほとんどは埴輪であるが、第17トレンチⅣ層から「寛永通寶」（第19図49）が検出されている。

第19トレンチ（第8図16）　前方部西隅角部に設定。当地は隅角方向に大きく張り出すとともに、独立丘陵状に高くなっている箇所もある。



第８図　恵我長野西陵トレンチの平面および断面(6)（1/80）

城郭としての機能を増強するために、手が加えられたものと考えられる。本トレンチでは表土（Ⅰ）とその下位の締まりのない崩落土（Ⅳ）の一部を除去した。本層は掻き出した際の土であろう。埴輪三片、須恵器一片が出土している。

第20～24トレンチ（第8図18～第9図22）　前方部正面部分に設けたトレンチである。これらのトレンチにおいては、墳丘側に浚渫土による盛土（Ⅴa）が厚く堆積している。また、いずれも霜降り状土層（Ⅴb′）が認められ、先述した現状と考えあわせれば、本層の性格を知るうえで参考となる。

第20トレンチではⅤa層の直下はきわめて堅く締まった灰色土となっている。ここには礫が多く含まれ埴輪片等も含むことから、本来は崩落土とも考えられるが、第21トレンチでは本層に礫は含まれず、強く突き固められた盛土（Ⅴb）と見なしておきたい。第20・21トレンチでは地山は確認していない。

第22トレンチの奥壁西側床面は地山と見間違うほど堅く締まった灰色土（Ⅴb）であるが、東側を断ち割ったところ、Ⅴb層の下位は霜降り状土層（Ⅴb′）となっており、埴輪片も出土している。地山の黄褐色粘質土（Ⅶa）は濠側に向けて、やや下降しほぼ水平に移行する。その上位に原初の濠内堆積土と見なしうる層は認められず、本来の濠の状態については不明である。第23トレンチの土層は一部に礫を混える灰褐色土（Ⅳ）が認められるものの、第22トレンチと酷似している。地山の黄褐

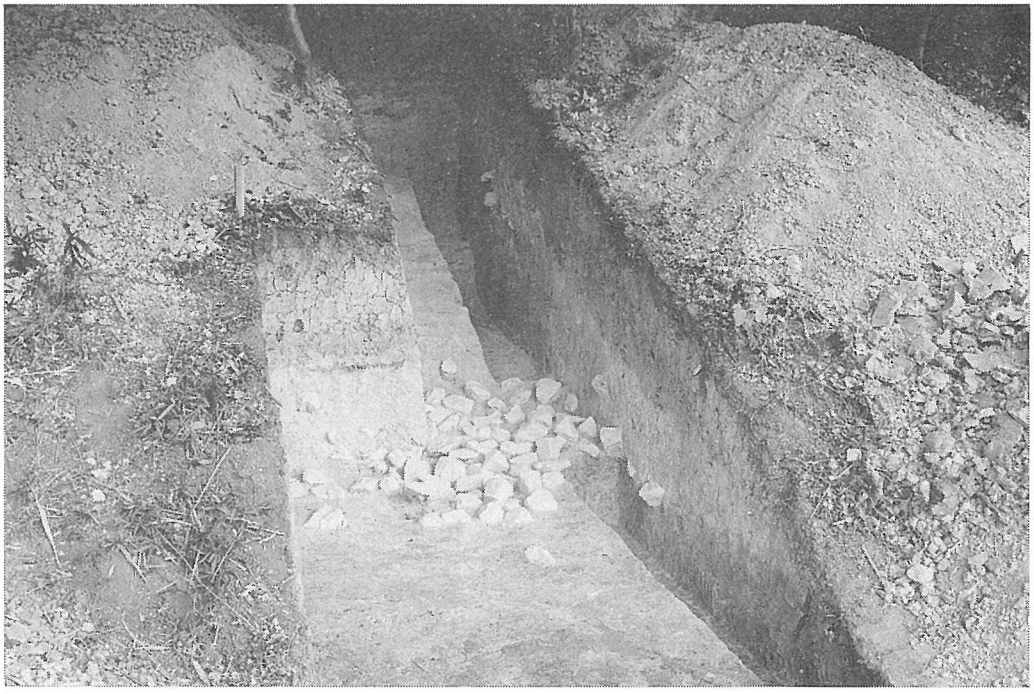
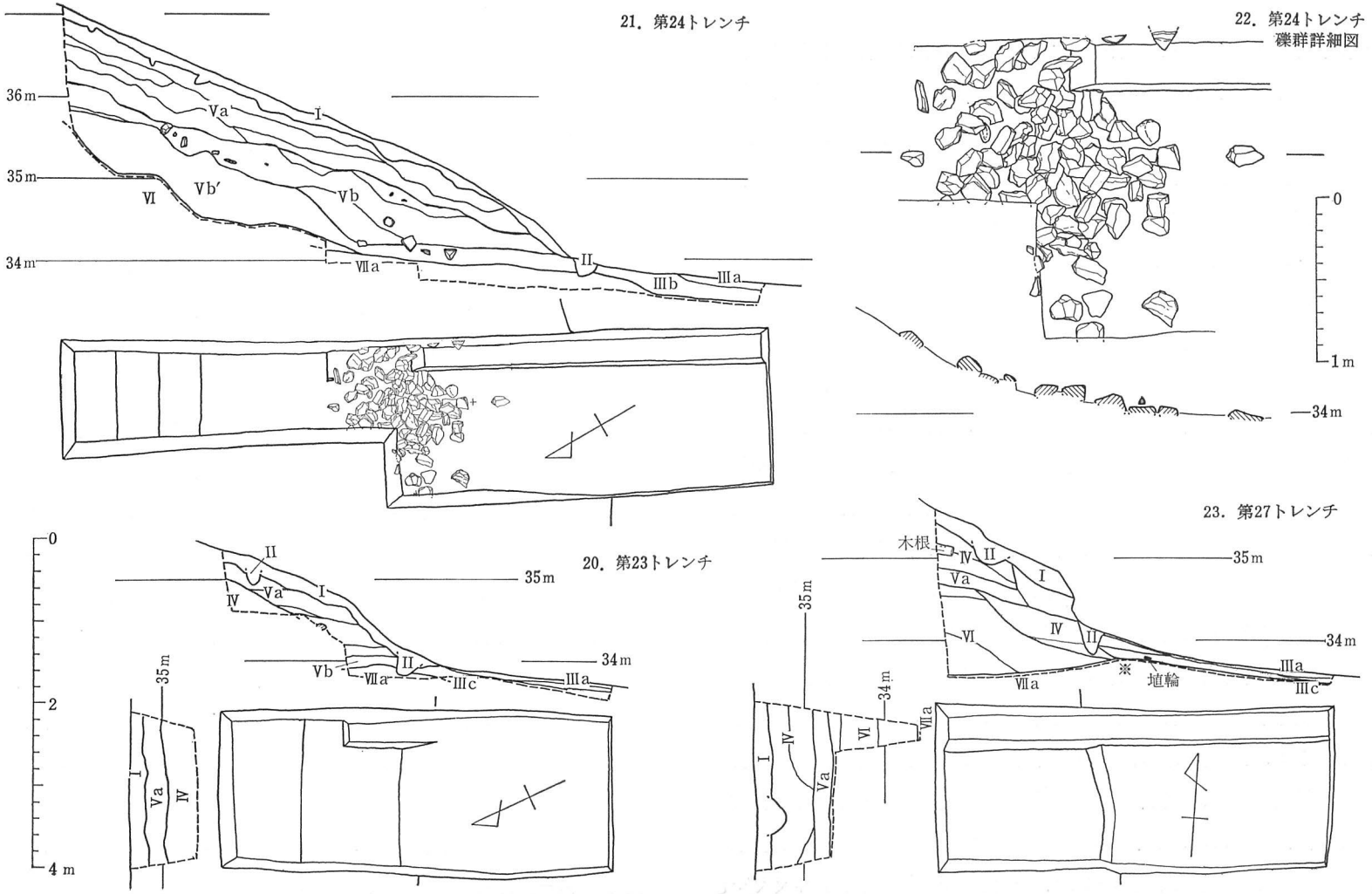


写真1　恵我長野西陵第24トレンチの状況



第9図　恵我長野西陵トレンチの平面および断面(7)（1/80），礫群詳細図（1/40）

色砂質土（Ⅶa）が墳丘側に緩やかに下降し、逆勾配をなしているのが注目される。地山の同様の状況は前方部東側辺に位置する第27トレンチでも認められた。

第24トレンチ（写真1）では礫がまとまって検出された。これらの礫は霜降り状土層（Ⅴb′）の傾斜変換点に集積されたような状態で出土しており、その上面を覆う堅緻な黄褐色粘質土など（Ⅴb）にも、比較的大振りの埴輪片とともに含まれていた。角が少し丸味をもつ角礫で、一辺が一五～二〇センチのものが多い。秩序をなす出土状態ではなく、地山や後述のⅥ層に接してもいないことから、葺石の石材として用いられたことはあっても、原初の位置を保つ葺石ではないであろう。Ⅴb層の上位は灰褐色系の粘質土、もしくは砂質土で堅く締まりレンズ状の小ブロック状をなす部分もあることから、基本的には盛土（Ⅴa）であろう。ただし、一部に崩落土が含まれている可能性もあろう。また、Ⅴb層の下位は裾部付近では粘質土、もしくは砂質土の地山（Ⅶa）に直接するが、奥壁より部分では粒子が細かく堅緻な灰白色砂質土など（Ⅵ）が地山（Ⅶa）間に介在していた。本層中には礫や埴輪片等は認められず、上位のⅤb′層との関連から考えて、本来の墳丘封土を含んでいる可能性がある。

第20トレンチ六〇点余り、第21トレンチ約一〇〇点、第22トレンチ五〇点余り、第23トレンチ二〇点余り、第24トレンチ約二七〇点の遺物が出土した。その大半は埴輪で、他に土師器や瓦器、瓦を含んでいる。第20トレンチ（第20図53）と第24トレンチⅤb層にそれぞれサヌカイト剝片が認められた。瓦器は第21トレンチⅤb層からまとまって出土した。

第26トレンチ（第8図17）　第25トレンチは欠番である。第26トレンチは前方部東隅角部に設けた。表土（Ⅰ）とその下位の締まりのない崩落土（Ⅳ）の一部を除去したところ、黄褐色粘質土（Ⅴa）が一部で認められた。浚渫した際の盛土であろう。ここでは地山は確認していない。

出土品として四〇点あるが、そのほとんどは埴輪片である。

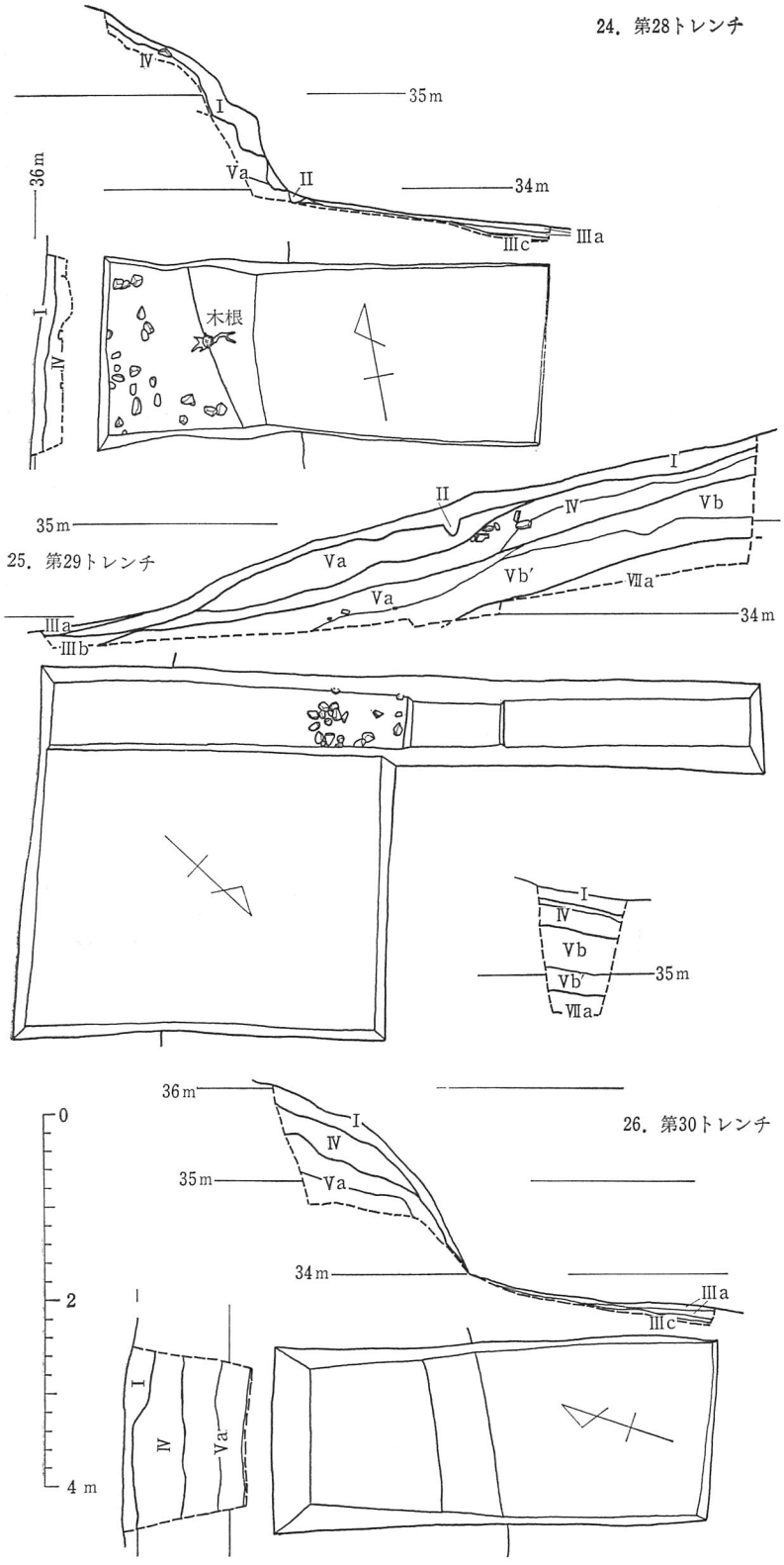
第27・28トレンチ（第9図23・第10図24）　前方部東側辺に設定した。第27トレンチでは裾部付近から粗砂層の地山（Ⅶa）が逆勾配を示し、その上面に刃金状に堅く締まった灰色系の土層（Ⅵ）が認められた。第24トレンチのⅥ層と土質が酷似しており、同様の性格と考えられる。このように考えることが許されるならば、本来の墳丘裾は第9図23の※印部分付近に求められるのであろうか。該所に礫などは検出されず、その掘方も確認されなかった。第28トレンチでは墳丘部の表土（Ⅰ）を除去したところ、拳大の礫が上部で埴輪片とともに、まとまって出土した。表面が滑らかな川原石様のものが含まれている。本来葺石として用いられたと考えられるが、含まれている土層は締まりが悪く軟質の灰褐色土で崩落土（Ⅳ）とすべきであろう。本トレンチでは地山は濠側を含め、確認していない。

遺物は第27トレンチから六〇点余り、第28トレンチから約一〇〇点が埴輪を中心に出土しているが、他に若干の土師器・須恵器・瓦片が認め

られる。

第29・30トレンチ（第10図25・26）　前方部東くびれ部には三角形状に大きく張り出した造り出しがある。その南側の前方部側辺との接合部に第29トレンチを、もっとも張り出した部分に第30トレンチを設定した。

第29トレンチでは当初設定したトレンチの奥壁付近で、霜降り状土層



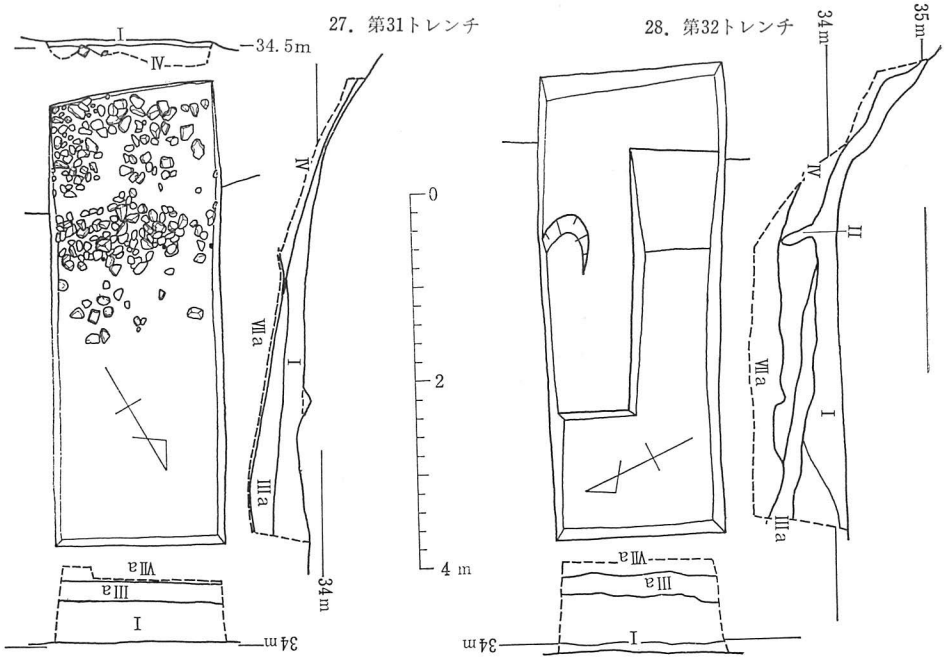
第10図　恵我長野西陵トレンチの平面および断面(8)（1/80）

（Ⅴb′）が確認されたため、その性格を追求するため、墳丘側に拡張した。その結果、Ⅴb′層の下位に粘性を帯びた茶（黄）褐色砂質土（Ⅶa）が認められた。大きめの白色粒（花崗岩のバイラン土）が安定しており地山と見なしうるであろう。地山は墳丘側から濠側に緩やかに傾斜している。Ⅴb′層の上面からは埴輪片や拳大の礫が出土しており、第24トレンチと似た様相を呈している。第30トレンチは表土下（Ⅰ）に締まりのよくない崩落堆積土（Ⅳ）と堅く緻密な黄褐色土系の土層を示す盛土（Ⅴa）が厚く観察された。本トレンチでは地山は確認していない。Ⅴa層には礫は含まれず、埴輪片も少ない。瓦片を包含することが注意される。一応、後世の盛土として理解したが、第24トレンチのⅤb層と土質的には類似していることもあり、年代的には築城時に整備された可能性も指摘できよう。造り出しは築造当初あったとしても、規模的には小さくなるとも考えられる。

第29トレンチから埴輪片を主に土師器・須恵器・瓦片一六〇点余り、第30トレンチからは埴輪片と瓦片が一四点出土している。第29トレンチから刻線のある埴輪の小片が一点確認されたのみで、明確に形象埴輪といえるものや土製品等は認められなかった。祭祀の場としての造り出しを裏付けることはできなかった。

二、外堤部

前方部外堤東隅角部付近の濠内は、入水口があるため、外部からの土



第11図　恵我長野西陵トレンチの平面および断面(9)（1/80）

砂の流入により、広い範囲にわたって陸化している箇所である。その堆積土の除去範囲と深度を決めるために二本のトレンチを設けた。

第31・32トレンチ（第11図27・28）　第31トレンチは前方部正面外堤内法裾、第32トレンチは前方部東側辺外堤内法裾に位置する。両者ともに、層序は似ている。つまり、ゴミ類を多量に含む黒色腐植土（Ⅰ）を表土とし、墳丘側は締まりを欠く崩落土である暗黄褐色土（Ⅳ）が外堤の上部を形成している。濠側では表土下にビニールなども含んだ黒色粘質土（Ⅲa）があり、灰色粘質土の地山（Ⅶ）に接していた。第32トレンチでは地山上面の凹凸が著しく、かって浚渫されたことをうかがわせる。第31トレンチの外堤裾部分では表土下に拳大の円礫がまとまって認められたが、丸太杭がすぐそばに認められることから護岸の際の裏込め石、もしくは侵入防止柵を取り設けた際の裏込め石の残りを外堤上から落としたものであろう。

遺物としては第31トレンチ一四点、第32トレンチ約五〇点が出土している。そのほとんどは埴輪で、陶器や燻瓦も含まれている。

三、まとめ

1　今回の調査と墳丘各部の踏査により、本陵は中世のある時期に城郭として利用され、大規模に改変されていることが明らかになった。古墳築造時に遡上するものとしては、第24トレンチで本来の墳丘封土の可能性がある土層を一部認めたものの、原位置を保つ葺石などは全く検出されなかった。

2　後円部は、墳裾が大きく削られた状態にあり、第3・9トレンチなどの所見では墳丘の基盤が旧石器を含む地山、もしくは弥生時代以前の包含層であることを確認した。よって、本来の墳丘裾は現状より外側にあった可能性が高い。

3　一方、前方部は、逆に後世の盛土が著しく、いわゆるフトン被りの状態となっている。本来の墳丘裾は第27トレンチを除いて、現裾より数メートル墳丘側に存する可能性が高い。とりわけ、前方部正面については、本来の墳丘を大きく破壊することなく盛土されている可能性が考えられる。また、正面では、非常に堅緻な盛土が第24トレンチなどで確認された。粘質土を叩き締めたとも思われ、城郭に伴う普請の可能性が考えられる。その中には、本来葺石として使用されていたと思われる石材の集積が確認できる箇所もある。

4　東くびれ部に位置する造り出し状張り出し部分については、古墳築造時に遡る確証は得られなかった。勿論、調査箇所よりも墳丘側にその痕跡を残していることも考えられようが、明確な形象埴輪や土製品が出土していないことにより確定は躊躇される。村田修三氏が指摘しているように[2]小曲輪として手が加わっている可能性があることも十分に考慮すべきであろう。

以上の調査結果をふまえ、施工にあたっては、以下のような仕様により実施することとなった。

1　墳丘裾部の護岸工事にあたっては、現在の裾部にふとん籠を設置する工法とした。現濠底のレベルの関係で、第33トレンチ付近の墳丘部の一部が地滑りしている箇所のみ二段積、他の部分は一段積みとなる。

2　ふとん籠は、ガマ状部分に砕石を詰め、現濠底に

A．吸出防止マットを置く

B．吸出防止マットを置いた上に基礎砕石を敷均して安定を保つ

というどちらかの工程を経た後に、割栗石を充塡したふとん籠をセットすることとした。使用石材は、大阪府和泉市槇尾山産の花崗岩系の割栗石である。

3　前方部外堤東隅角部の堆積土に関しては、現法裾先端から二メートル以遠に限ってGL－一〇～四〇センチ、つまり標高三三・七メートル以上を除去することとした。その土量は約三〇〇立方メートルである。

（福尾正彦）

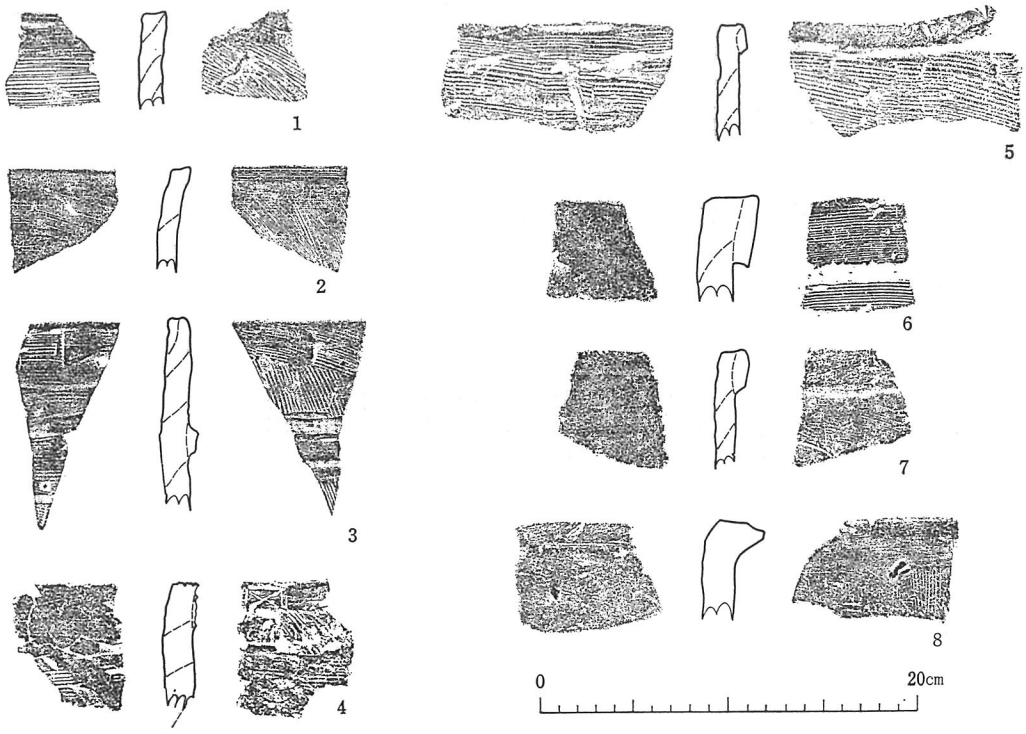
註

（1）天野末喜ほか「岡ミサンザイ古墳の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告』Ⅲ（藤井寺市文化財報告第3集）、一九八八年（藤井寺市教育委員会）

（2）村田修三「「陵墓」と築城」『「陵墓」からみた日本史』、一九九五年

出土品

今回の調査で、多くの遺物が出土した。埴輪が中心であり、その他に石器、瓦、貨幣等が少量出土している。原位置を保って出土したものはなく、またトレンチ内からの出土品以外に、裾部における表採品もかな



第12図　恵我長野西陵出土品（1）円筒埴輪口縁部（1/4）

りの数にのぼっている。表採品の中心は埴輪である。

一　埴輪

すべて破片で、正確に器高、径を復元できるものはない。円筒埴輪が大半を占め、普通円筒以外に朝顔形埴輪の破片も目立つ。形象埴輪は僅かに認められる。出土した埴輪は、土師質・須恵質の両方が見られるが、土師質の場合でも黒斑は見られない。外面の調整技法は、ヨコハケ、タテハケ、ナナメハケのほかに、板ナデと思われるものも見受けられる。器壁は、一～二センチの厚さに収まるものが多いが、一センチ以下のものも少数ながら存在する。

以下、部位ごとに分けて記述を進めていく。

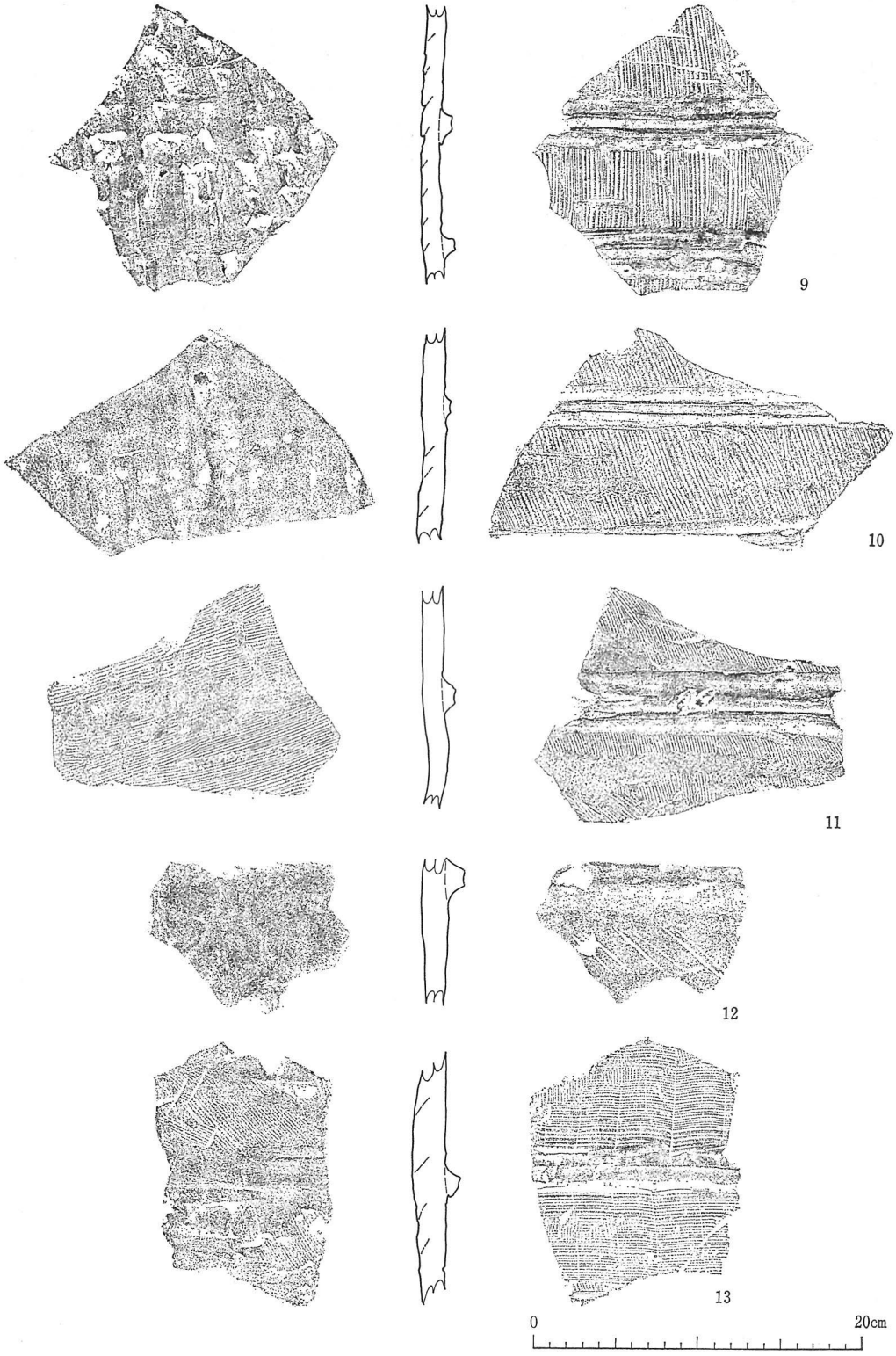
口縁部（第12図）

基本的な断面形態は、わずかに外反するものの、おおむね直線的であることを特徴とする破片が多い。また、端部に貼付突帯を施したものが目に付くのも特徴である。1～3は突帯をもたないもので、図示したものは、いずれも須恵質である。内外面の調整にはそれぞれハケ目、ナデなどの違いがあり、特に3は内面に削りのような鋭い横方向のナデが見られる。これら三点に共通する特徴としては、端部に非常に強い指ナデ痕が残ることである。4～8は貼付突帯をもつものである。5は須恵質であるが、他は土師質である。焼きと口縁形態は関係があるのかもしれない。4は、突帯が剥離している。端面には、線刻で長方形に区画された中に×印が見られる。また、7にも外面に弧を描くヘラ描きが見られる。6は器壁が厚く、分厚い突帯が貼り付けられている。大形品になる可能性が高い。8は、貼付突帯であるかどうか不明瞭であるが、一応ここではそのように扱っておく。端部に削りを施しているのが大きな特徴で、とくに面取りした部分の削りは鋭い。

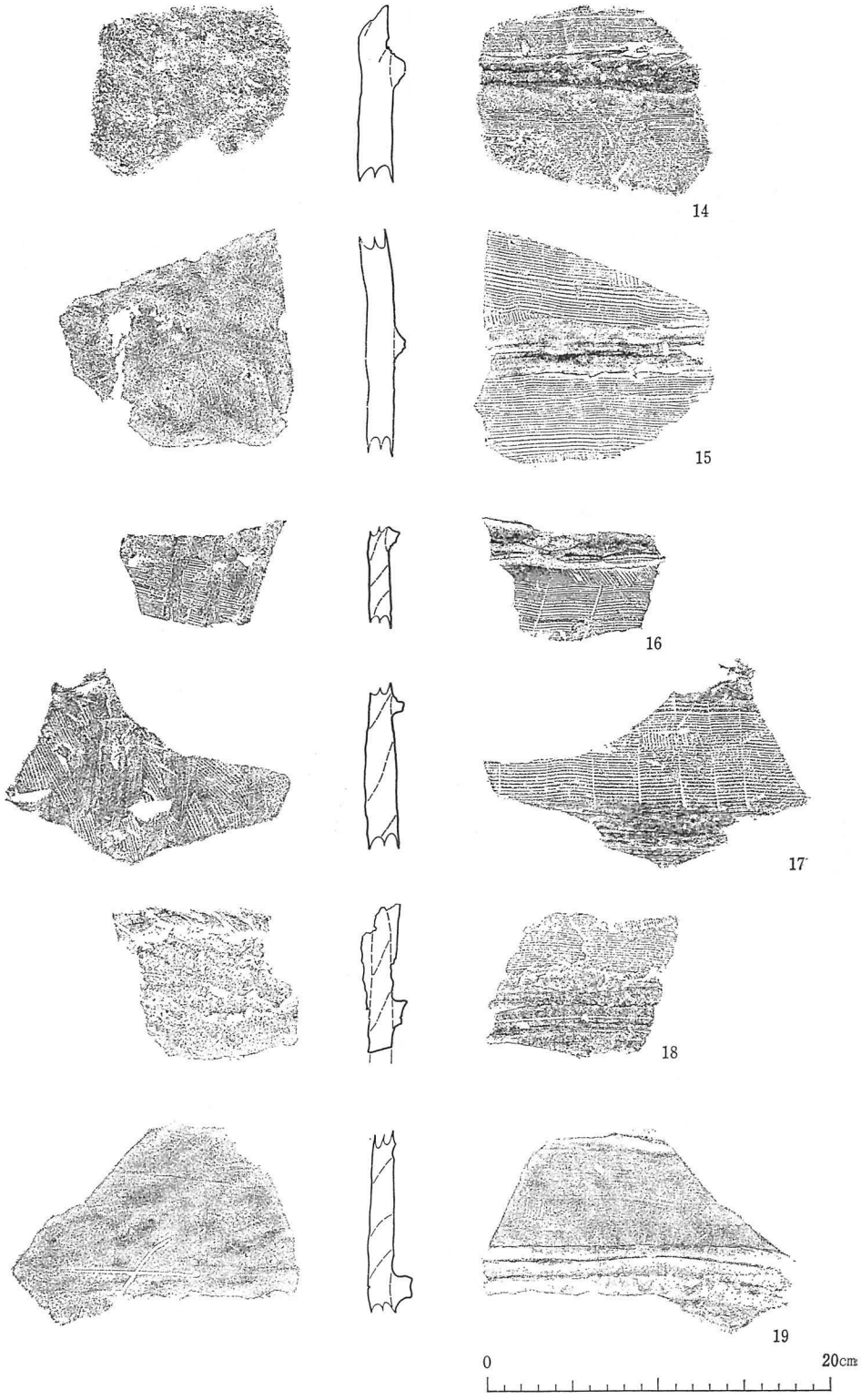
体部（第13・14図）

破片としてもっとも多い体部は、細片が多く調整の不明瞭なものが大半を占めるが、基本的にはハケ目調整が施され、ハケ目方向のわかった個体に限って比較すると、ナナメハケの割合がもっとも高く、ヨコハケ・タテハケはナナメハケの半分以下の割合となる。しかし、実際にはナナメハケとタテハケを厳密に区別することが困難なものも多く、両者をひとつに考えておく方が現実的であろう。ハケ目には同じ方向でも粗密の差があり一様ではないが、タテハケ・ナナメハケが一次調整で終了するのに対し、ヨコハケは二次調整を確認できるものがある。ここでは、口縁部にも確認できるものの、体部でもっとも多くヨコハケ個体が知られることから、少し詳しく触れておきたい。

9・10はタテハケ資料であり、内面には縦方向の指ナデ痕が残ることで共通している。9は、その指ナデが不十分なため粘土接合痕が非常に明瞭に残っている。11・12はナナメハケの個体であるが、11のようにタテハケとひとつにしてよいものも出土している。内面は横方向の粗いハケ調整が施されている。12は、あたかもハケ目を模式化したような線刻が施されている。破片であることと磨滅のため全周していたかどうかは



第13図　恵我長野西陵出土品（２）円筒埴輪体部（1/4）

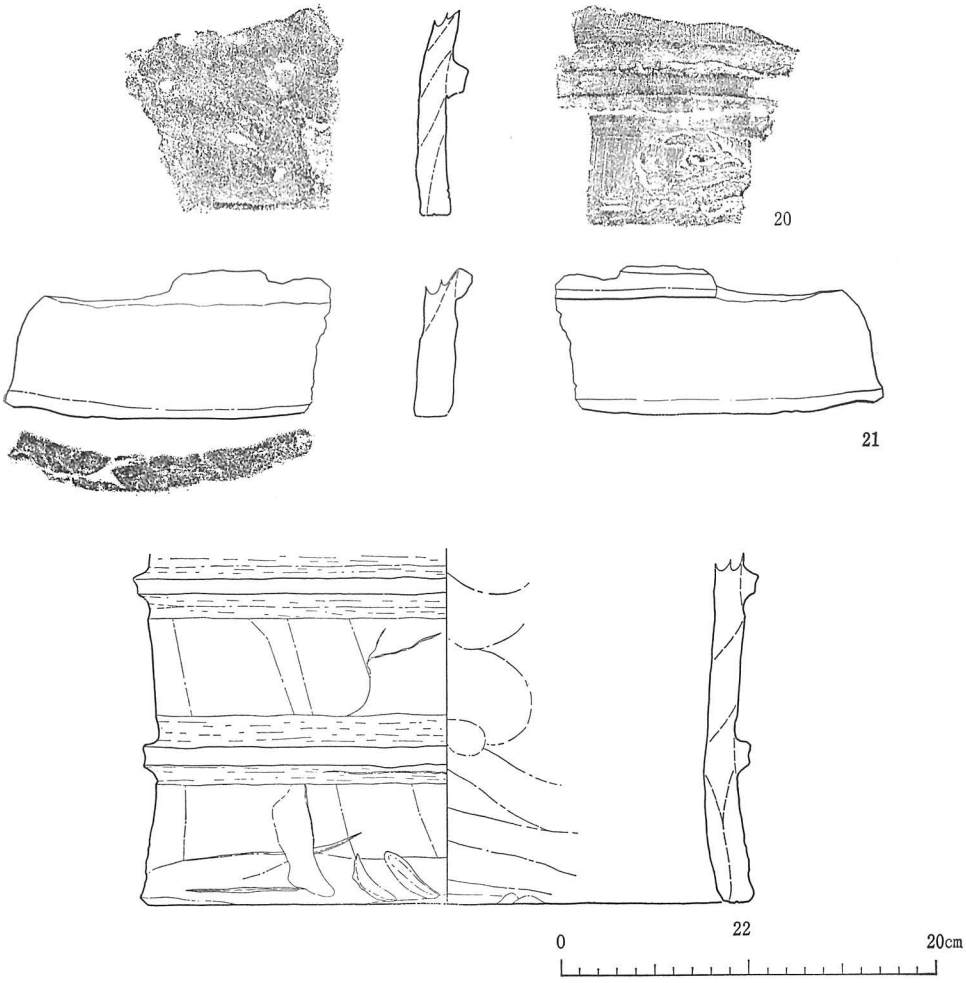


第14図　恵我長野西陵出土品（3）円筒埴輪体部（1/4）

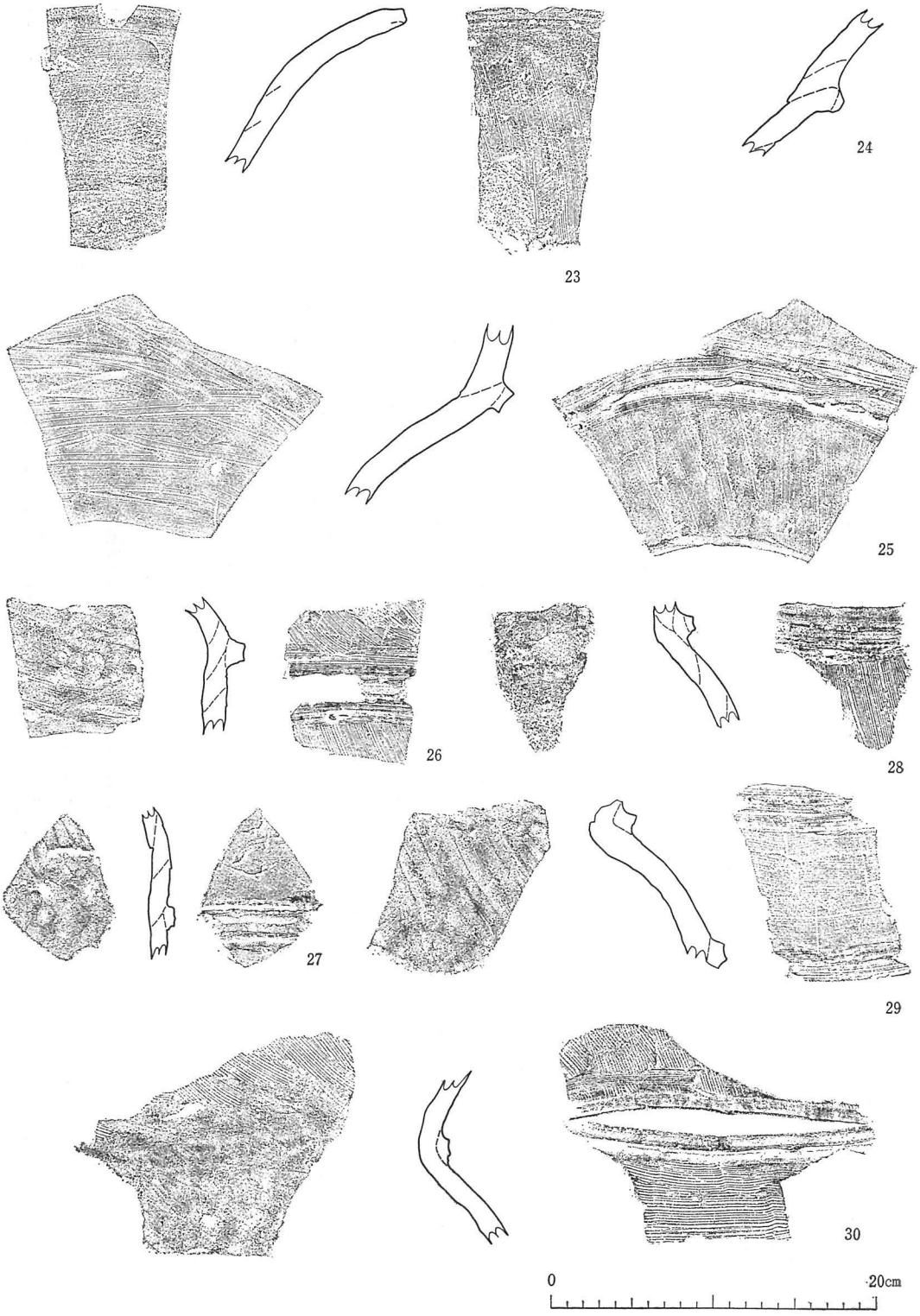
不明である。

13～19はヨコハケの個体である。円筒埴輪以外に朝顔形の肩部にもヨコハケ個体はあるが、それは朝顔形埴輪の項で記述する。

ヨコハケは基本的には二次調整である。しかし、これらは二者に分けられる。すなわち、タテハケの後、突帯を接合し、最後に突帯間にヨコハケという通有の調整を施す前者と、タテハケの後、すぐにヨコハケを施し、それから突帯を接合する後者である。さらに細かく見ると、前者については、通有の調整ではあるが、突帯を挟んで上下が残る破片を観察する時、上か下の段どちらかに二次調整が施され、もう一方の段には施されていないものが多い。必ずしもすべての段に二次調整のヨコハケが施されていたわけではないようである。後者については、小さい破片資料ばかりなので確定的ではないが、突帯とヨコハケの隙間に、一次調整のタテハケの見えるものを指摘できる。これは、ヨコハケを施す際に、あらかじめ突帯の接合部分を意識的に調整範囲から外すことによって、接合の際

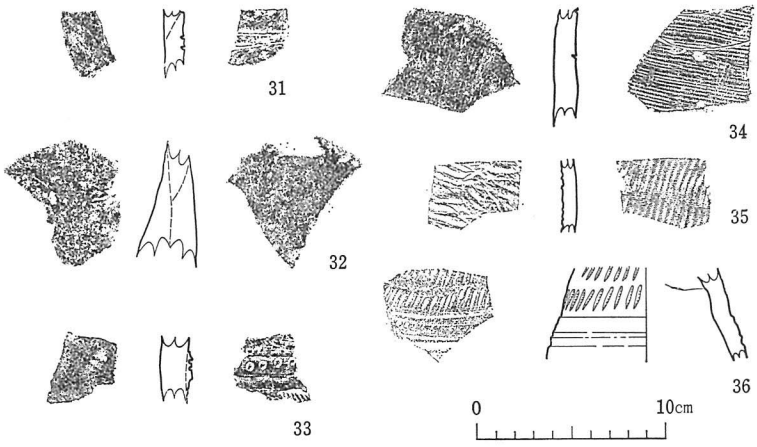


第15図　恵我長野西陵出土品（4）円筒埴輪基部（1/4）



第16図　恵我長野西陵出土品（5）朝顔形埴輪（1/4）

の目安とした可能性も考えられる。これは、突帯の間隔が決まっていたことを示すと考えられ、実際に、多少の誤差はあっても突帯間隔はほぼ一定の幅に収まる。また、これと関連して、一段分が残る破片の中には、突帯間を、一段分の幅をもつ原体で調整している個体の存在を指摘できる。



第17図　恵我長野西陵出土品（6）文様をもつ埴輪・須恵器（1/4）

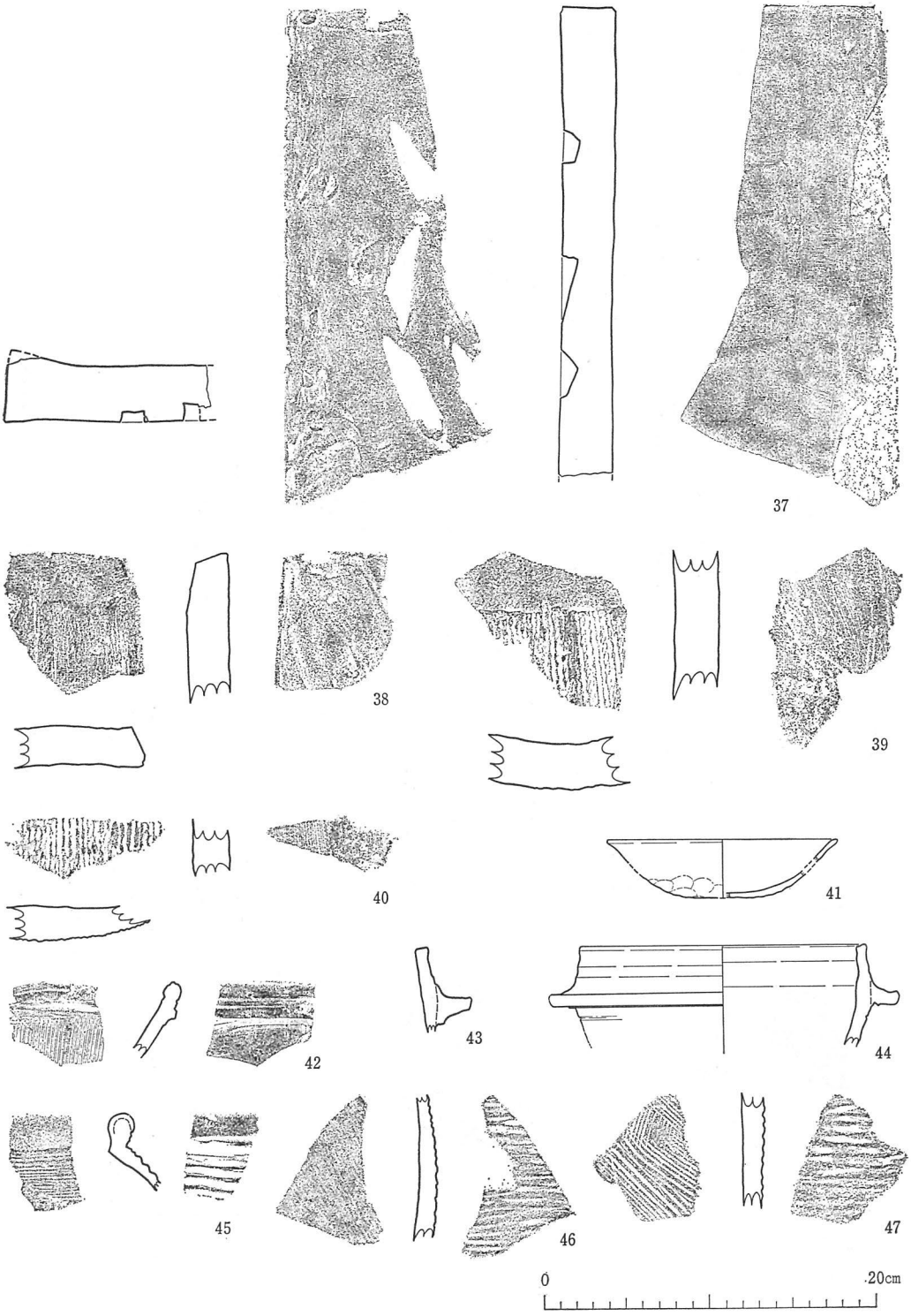
そのほか、ヨコハケの静止痕の間隔は、確認できる破片を見る限りでは三〜五センチ前後のものが多く、それ以外では破片の大きさを超えるものが多く正確な間隔はわからないが、七〜九センチ以上のものも比較的多いことが指摘できる。また、ハケ目原体は基本的には器面から離さずに調整を施すが、中には明らかに器面から離しなでつけるように施すものもある。しかし、この場合厳密には、ヨコハケというよりは多少角度も異なるのでナナメハケとして考えた方がよいかもしれない。

13・14は前者に属する個体で、15〜18は後者に属する個体である。17は比較的大きな破片で、径がある程度正確に推定できる。狭い間隔のヨコハケが特徴的である。18は、粘土の接合にも特徴をもつ。口縁状の端部に刻みを施し、さらに粘土を足しているが、その粘土に含まれる砂礫の大きさがまったく異なる点が特徴的である。これと同じ状況を示すものが朝顔形埴輪の口縁部にも存在している。19は、ハケ目ではなく板ナデであるが、横方向に施されており、ここでは一応同様のものとして加えておく。ただし、破片はごくわずかであり、調整技法としては少数派であったと思われる。

なお、突帯の断面形態は様々であるが、台形・三角形が主流を占める。台形のものは、上辺の方がやや突出する個体が目立つほか、突出度の極めて低いものも認められる。三角形のものは、丁寧に付けられているものがある一方で、雑なものも認められる。

基部（第15図）

基部資料は少ない。全体的な形態としては、いったん内傾したのち、直立またはやや外反しながら立ち上がる点が共通するようである。20・21は底面から突帯上辺までの長さが約七センチ、22は八センチを測る。この間隔には、数センチ程度のばらつきがあるが、ほぼ一定の幅に収ま



第18図　恵我長野西陵出土品（7）瓦・土器類（1/4）

る。内面は指ナデが顕著な点で共通するが、外面については異なり、特に22は縦方向に板ナデを施している。

朝顔形埴輪（第16図）

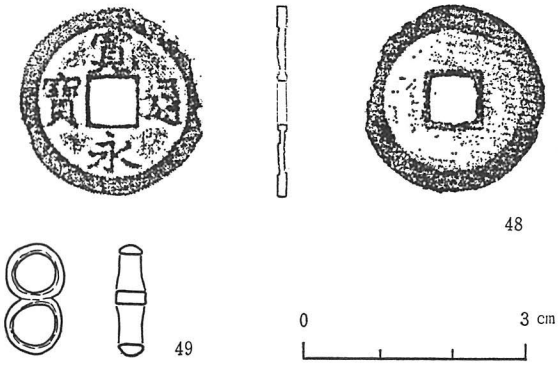
朝顔形埴輪として8点を図化した。23～25は口縁部である。1は、外面にナナメハケの後タテハケを施している。内面は端部に近い範囲に密なヨコハケが見られるのに対し、奥に入るとナデの痕跡が所々に見られるまばらなナナメハケに変わり、部位によって調整の異なることが観察される。24は土師質で、全面が磨滅しているため調整は不明である。この個体は粘土の接合に特徴がある。体部破片の18に類似し、継ぎ足した粘土に含まれる砂礫の大きさがまったく異なる。25は、内外面とも細かいハケ目調整が施されている。突帯に左から右へ強い指ナデが施され、右上方へ払うように離している痕跡が観察される。26～30は肩部の破片である。肩の形状は丸みに乏しいもの（26・30）、比較的丸みをもつもの（27・28・29）に分かれる。調整技法は、タテハケ・ナナメハケの他、体部同様、ヨコハケの個体が見られ、突帯の接合前後の別がある。27が突帯接合後にヨコハケを施した個体で、29・30は突帯接合前に施した個体である。27のハケ目原体は一回ごとに器面を離れているようである。雑に施されている印象を受ける。29は原体が器面から離れず、静止痕の間隔は四～五センチで、体部の間隔と変わらない。30は、条痕のような粗いハケ目で、静止痕の間隔は四～七センチが確認できる。なお、ヨコハケが施されているのは肩部までである。

形象埴輪（第17図）

形象埴輪が少ないことは、既に指摘されていたが、今回の調査でも、確実に形象埴輪といえるものは二点しか確認されていない。31は、片面に三本の刻線が認められるが、本来は二本を一組とする単位で何組かが刻まれていたものと考えられる。細片で磨滅も激しく、器種の特定は難しいが、蓋形埴輪の立飾りの可能性が考えられよう。32も31と同様、細片であり本来の端部が不明瞭なため、器種の特定が難しいが、粘土の接合状況から考えると、家形埴輪か盾形埴輪の可能性が指摘できる。

その他（第17図）

その他として、文様を施している破片を挙げておく。33は突帯に竹管文が施されているもので、突帯自体は著しく低い。なお、この竹管文は一周せずC字形を呈している。34は、欠損のため全形を知りえないが、現状では二重の弧線となっている。両者とも外面はナナメハケ、内面は不定方



第19図　恵我長野西陵出土品（8）貨幣・銅製品（1/1）

向の指ナデを施している。

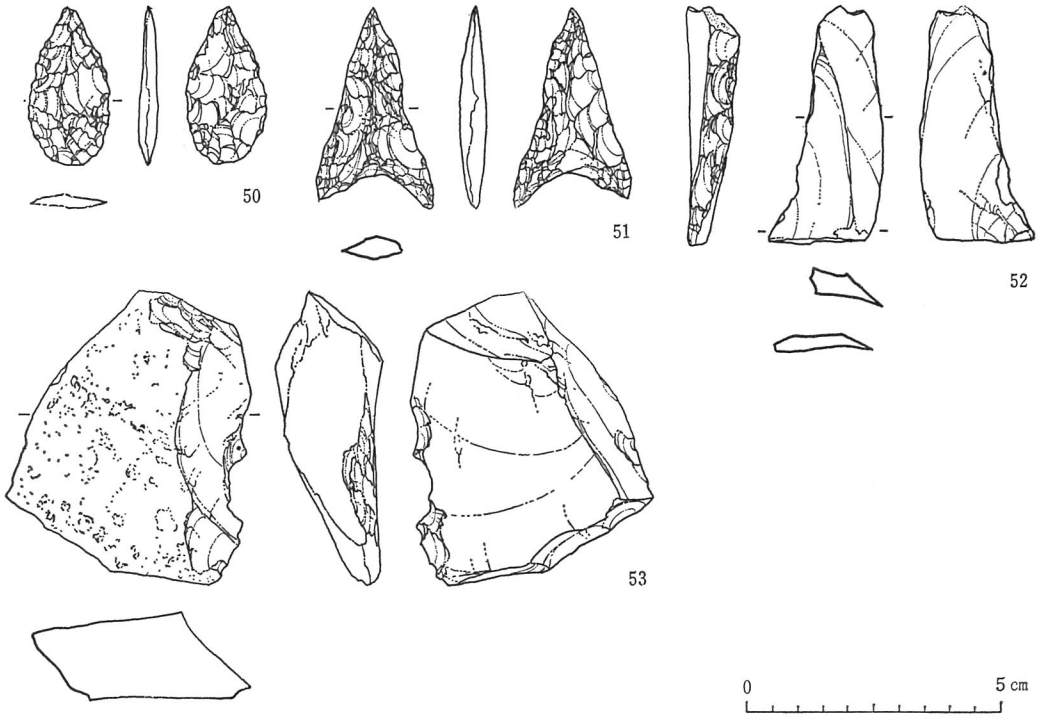
二　須恵器（第17図）

須恵器は破片が少数出土している。35は壺の体部の破片と考えられるものである。外面は平行叩きの後、カキ目を施している。内面には同心円の当て具痕が残る。36は筒形器台の破片と考えられる。長方形と考えられる透かし孔が二箇所確認でき、位置から本来四箇所あったものと思われる。外面には櫛描き列点文を施している。

三　中近世遺物（第18・19図）

既に述べたように、本陵は墳塁が城郭として利用されており、それに伴うと思われる遺物も出土している。

第18図の37～40は瓦で、37は大形の破片で、ほとんど湾曲がなく、塼のような形状を示している。全面黒色を呈し、片面に三角形の刺突痕が残る。38は平瓦の端部が残っている。暗灰色を呈し、各面とも削りによる調整が施されている。特に端面の削りは明瞭である。39・40は瓦の小片で、ともに同じ特徴をもつ。片面に縄目が、反対の面には布目が残っている。色調は黒灰色である。41は瓦器椀で磨滅が著しく細片となっている。胎土は密で明灰白色を呈するが、外面には黒色が残っている。調整痕としては、底部外面の指頭圧痕が顕著である。42は、備前の摺鉢と考えられる。器壁が薄く、径もそれほど大きくない小型品であろう。43・44は土師質の羽釜である。基本的にはヨコナデ調整であるが、43は内面に横方向のハケ調整、44は外面鍔の下に削り調整が見られるなど、



第20図　恵我長野西陵出土品（9）石鏃・旧石器（2/3）

個体ごとに微妙な違いがある。また、44には外面に煤の付着が見られる。45～46は土師質の甕で、湊焼である。45は口縁部で、端部は断面円形の肥厚した形状を示す。外面は幅広の単位をもつ粗い叩き痕が残る。口縁部から鋭く屈曲した体部内面には横方向のハケ目が見られる。46・47は体部で、外面は45と同様の粗い叩き痕が残り、内面のハケ目も粗い。色調は各々異なるが、灰色系の比較的薄い色合いを呈している。

金属製品（第19図）としては、貨幣と不明銅製品がある。48の貨幣は寛永通宝で、一部側縁を欠くが、遺存状態は良好で、字は明瞭に読み取れる。49の不明銅製品は、円を連結させたような形状を示す。穴には紐が残っているが、現状では緑青に覆われかなりもろくなっている。

三　石器（第20図）

トレンチ内からの出土も含め、現在の濠際にはサヌカイトが点々と見受けられる。そのうち、トレンチ内出土の四点を図化した。

50・51はともに縄文時代の石鏃で、51は前期の所産である可能性が考えられる。52・53はともに旧石器で、52は翼状剥片、53は盤状剥片である。52は、墳丘Ⅶb層中からの出土であるが、他の3点は浮いた状態での出土である。

石器の検討については、関西大学博物館山口卓也氏に多大な協力を賜わった。記して感謝申し上げる。

（清喜裕二）

磐園陵墓参考地堆積土除去区域の事前調査

磐園陵墓参考地は奈良県大和高田市築山にあり、墳塋長二〇〇メートル以上を測る。奈良盆地西側に連なる馬見古墳群の南端に位置し、この古墳群の中では最大級の規模を誇る前方後円墳である。

さて、本参考地の周辺が住宅地としての開発が進むとともに、周濠の環境整備が求められてきた。大和高田市においても市域の環境美化を市政の目標とすることから、当参考地の周濠の美化には大いに協力を申し出ている。特に、周濠の北側は経年の堆積土が厚く堆積し、大雨などによって水量が増加すると近隣の民家へ濠水が溢れ出る状況にある。よって北側の堆積土の浚渫を計画することとなったが、その工事に先立ってどれほどの堆積土が除去可能であるかについての知見を得る必要が生じた。このことから今回の事前調査は堆積土の深度、及び遺構、遺物の有無を確認することを目的として、平成八年十月十四日から二十七日までの間に実施したものである。

調査の方法は第21図に示したように、後円部北側から前方部正面にかけて墳塋側に七箇所、外堤側に八箇所の合計一五箇所のトレンチを設定した。各トレンチの大きさは二メートル×二メートルを基本とし、必要に応じて若干の拡張を行った。墳塋側と外堤側のトレンチはそれぞれ相対するような位置に配置し、それぞれのトレンチ間は五〇センチおきに